

茨城大学学報

第322号

平成27年8月～平成27年9月



「水戸黄門まつり」に参加した学生や職員ら

INDEX

- ◆ 高校生向けの1日体験化学教室を開催
- ◆ 「茨城大学ニュースダイジェスト」発行スタート
- ◆ 海外派遣学生旅費支援金の制度をスタート
- ◆ 「水戸黄門まつり」に10年連続で参加
- ◆ 日本ボート協会主催の全日本大学選手権大会で漕艇部が銅メダルの快挙
- ◆ 理系志望の高校生が3日間の研究生活体験
- ◆ ひらめき☆ときめきサイエンス「ips細胞から眺めよう、私たちの未来社会」
- ◆ 科学研究費学内説明会・研究活動上の不正行為等への対応説明会を開催
- ◆ 関東・東北豪雨 学生ボランティアが現地で支援
- ◆ 平成27年度 学位記授与式(9月期)を実施
- ◆ 一般向けにヤギ飼育講座を開催
- ◆ 県、市民団体と連携して自然エネルギー開発・推進の人材を育成
- ◆ 大学の男女共同参画の最前線を学ぶ学内シンポ
- ◆ 人文学部 茨城県小美玉市と連携協定を締結

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 高校生向けの1日体験化学教室を開催

8月1日（土）、高校生が本格的な化学実験や講義を体験する「茨城大学1日体験化学教室」を水戸キャンパスで開催しました。

「茨城大学1日体験化学教室」は、将来を担う高校生に化学の魅力を肌で感じてもらうことを目的として、理学部や工学部が中心となって毎年夏休みに開催しています。今年度は、茨城大学の理学部、教育学部、機器分析センターの主催、日本化学会および同会関東支部の共催で実施し、県内外から28人の高校生が参加しました。

はじめに、理学部の西川浩之教授が「有機エレクトロニクスと化学」と題して講演。無機物質ではなく有機物質を用いた電子機器や半導体について、その歴史や原理、将来の可能性についてわかりやすく紹介し、参加した高校生たちもメモをとるなどして興味深く耳を傾けていました。

講義後、7つの研究班に分かれ、それぞれの研究室で実験を体験しました。実験は、日用品や食品に含まれる香料、色素、カフェインといった成分を、試薬や分析機器を使って取り出すものが中心で、化学を身近に感じられる内容で構成。白衣や保護メガネをつけた高校生のそばに立ち、丁寧に実験の指導をしていたのは主に大学院生のTA（ティーチングアシスタント）で、実験結果を待つ間や休憩時間にも、受験や大学生活について語り合う場面が見られました。

運営を担当した機器分析センターの神子島博隆准教授は、「今の高校の理科の授業では、自分の手で時間をかけて実験をするのが難しい。最先端の研究であっても、実験をして初めて結果が得られ、大きな発見につながるという過程は変わらない。その喜びを感じてもらい、化学に興味をもってもらえれば嬉しい」と話しています。



市販の紅茶からカフェインを抽出する実験に挑戦する高校生たち

◆ 「茨城大学ニュースダイジェスト」発行スタート

茨城大学広報室では、大学の研究や教育、イベント等の取り組みに関する最新のニュースを学内外に発信するため、新媒体「茨城大学ニュースダイジェスト」の発行をスタートしました。A4縦1枚のボリュームで、4～5つのニューストピックと主なメディア掲載の情報を紹介し、今後毎月上旬に発行します。

広報室では、「学部・組織をこえた本学の取り組みを学内の学生や教職員に関心をもってもらうため、コンパクトに、わかりやすく情報を伝えられる形式にした。また、今後は『大学概要』などと一緒に配布することで、対外的な情報発信にも積極的に活用していきたい」としています。

最新号のPDFファイルは、茨城大学のホームページ内、「広報誌・刊行物」のページからダウンロードできます。

<http://www.ibaraki.ac.jp/general/info/pr/publish/>

NEWS 2015/08 No.01
茨城大学ニュースダイジェスト
発行：茨城大学広報室
029-228-8008
koho-pr@ml.ibaraki.ac.jp

今号の一枚
水戸キャンパスのオープンキャンパス
7,797人が来場
7月29日に開催されたオープンキャンパスに、茨城大学水戸キャンパスの来場者数は、前年比約20%増の7,797人が来場し、約2,000人が参加した。

研究
レアアースにおける電場分布を決定・最適化する世界初の研究手法を開発
—工学部 伊賀文俊教授と大阪大らのグループ—
大阪大学大学院基礎工学研究科 関山明教授らのグループは、茨城大学工学部などと共同で、X線を用いて光電子のエネルギー方向を決定する角度分解型光電子分光法によって、局所的な不完全な電子軌道を有する固体内部での絶対値から得られた真実の電場分布を決定することに成功し、これまで想定困難だった従来の立方晶構造のレアアース化合物に対する局所的な電子の挙動などが明らかになり電場分布が決定された。今後、レアアース磁性材料の開発やグリーンリソグラフィにむけた材料開発への応用など、様々な物質の真実の電場分布決定に応用されることが期待できます。本成果は、日本物理学会が発行する英文誌 *Journal of the Physical Society of Japan* (JPSJ) の 2015年7月号に「*Direct Observation of the Charge Order*」として掲載されました。

研究
指示方向の判断エラーを削減する恐れのある自動車ウインカーとは？
—工学部 兵内浩文准教授と卒業生による論文が学会誌に掲載—
工学部メディア連携工学科の兵内浩文准教授と同学科を2014年3月に卒業した田原直幸さんによる論文「指示方向の判断エラーを削減する恐れのある自動車ウインカーについて」が、7月15日、電子情報通信学会論文誌Eの「信号機のウインカー」欄に掲載されました。国土交通省の「道路運送車両の保安基準」では、ウインカーの物理的特性や光学的特性は厳しく規定されていますが、デザイン性の規定はなく、近年は自動車の高品質化を高めるために高いデザイン性が求められる傾向があり、ウインカーの形状も多様化されています。兵内准教授は、今回の研究では、自由すぎるデザインにはウインカーとテールランプの内外配置の任意性が人間の視覚情報処理特性と矛盾する点により、ウインカーの指示方向が誤認識されやすくなる場合があることを工学部の実験によって明らかにしました。

地域連携
水戸市川又町の田んぼアート完成
工学部の住谷教授が技術監修
教育学部学生がデザインに参加
水戸市川又町で昨年より行われている田んぼアート、CDC事業として、工学部の住谷浩教授が、地元の方々と水戸市との連携で行っています。住谷教授は実地指導を考慮してデザインの内容を調整し、教育学部学生がデザインに参加しました。今年度は、教育学部の学生たちがデザイン作成に参加しました。

地域連携
人文学部「地域課題研究」
地域での3年間の取り組みについて
最終報告会
足かけ3年かけて地域課題に取り組み続けてきた人文学部の「地域課題研究」の最終報告会が、4年生の卒業論文がテーマの報告「報告」を開催し、これまで活動を支えてきた地域の方々も来場し、あたたかいアドバイスをいただきました。

国際
パリで行われた気候変動に関する国際会議で三村学長が基調講演
7月7～10日、気候変動問題について議論する「Our Common Future Under Climate Change」という会議がパリで開催され、三村学長が気候変動の専門家として登壇し、約2,000人の参加者前に基調講演を行いました。三村学長は、今年後半に向けて気候変動の悪化が予想されるため、それに対する個人のあるべき行動と社会のあるべき行動を、個人レベルでの「11項目」提案、ヒートショック対策など気候変動対策のノウハウとを組み合わせるべき社会のレジリエンス(回復力)向上が必要であることを強調しました。

お知らせ
7/8 茨城新聞「茨城大が新学舎 県立の山本キャンパスが「2」/7/9 News every. (日テレ)「ウニコちゃん 両利手に驚く「数多」笑顔を 各地に川崎が」/7/9 茨城新聞「県立の山本キャンパスが「2」/7/10 News every. (NHK)「新発見」茨城大の国際会議に出席」/7/11 茨城新聞「茨城大生が国際会議 25,26日に海外上陸」/7/29 News every. (NHK)「中国人留学生が発見した大洞窟が「お宝」/7/29 茨城新聞「茨城大生が国際会議」

●茨城大学の研究や活動についての最新情報をお伝えすべく、「茨城大学ニュースダイジェスト」を新たに発行しました。内容についてのお問い合わせや情報提供は、茨城大学広報室 (koho-pr@ml.ibaraki.ac.jp/029-228-8008) までお問い合わせください。

◆ 海外派遣学生旅費支援金の制度をスタート

本学では「茨城大学海外派遣学生旅費支援金」制度を今年度より設け、その「第一期生」となる8・9月分の受給学生への授与式を、8月3日（月）、学長室で行いました。

本学では、今年4月に国際戦略室を設置し、海外の大学との大学間交流協定の締結拡大や各種海外プログラムへの金銭的支援、インセンティブ制度などを通して、学生の海外留学を促進しています。今回設けた「茨城大学海外派遣学生旅費支援金」は、授業の一環として行われる海外での語学研修や文化研修、国際インターンシップにかかる旅費の一部を、一人当たり5万円を上限として支援するものです。短期の海外派遣を積極的に支援することにより、これまで経済的な理由などで踏み出せなかった学生も、留学をもっと身近なものとして捉え、多種多様な異文化交流を果たせるようになることが期待されています。実際、本制度の導入によって昨年度よりも参加希望者が増えたプログラムもあります。

授与式で三村信男学長は、「がんばって勉強し、また、おおいに楽しんでください」とエールを送り、自身の海外での経験なども交えながら、「治安の悪い地域もある。自分で身を守ることを心がけ、気をつけて過ごしてほしい」と話しました。韓国で行われる2週間の企業インターンシップを控え、今回学長から目録を受け取った人文学部3年の関 香織さんは、「自分の力で留学したく、アルバイトでお金を貯めてきたが、今回支援金をもらったことで、その分の時間は仕事を入れずに事前の勉強などに充てられる」と、嬉しそうに語りました。



三村学長から目録を受け取る学生たち

◆ 「水戸黄門まつり」に10年連続で参加

8月8日（土）、水戸市で開催された「第55回水戸黄門まつり・市民カーニバル in MITO」に参加しました。

「水戸黄門まつり」は昭和36年から続く水戸市の祭りで、期間中は山車巡業や花火大会等様々なイベントが開かれ、茨城大学はこのうちの「市民カーニバル in MITO」に10年連続で参加しています。今年は学内のよさこいサークル“海砂輝（みさき）”が振り付けを考案し、学生や教職員など約100名が参加。当日は三村信男学長も応援に駆け付け、参加者らは約4時間にわたって「黄門ばやし」「ごきげん水戸さん」の2曲を踊りながら大通りを行進しました。カーニバルの中盤では、水戸市マスコットキャラクター“みとちゃん”の応援歌「もっと meet みとちゃん」に水戸市の教師が振り付けをした「みとちゃんダンス」を全50団体約3,400名全員が一斉に踊る場面もあり、沿道からは大きな歓声と拍手が送られました。

カーニバル終了後に開かれた懇親会では学生と教職員がにぎやかに歓談し、参加したベトナムからの留学生は「本当に楽しく、日本での貴重な思い出になった。まもなく留学を終えて帰国するが、これからも日本に来たい」と感想を述べていました。



カーニバルの様子



三村学長・袖山局長も法被を着て参加

◆ 日本ボート協会主催の全日本大学選手権大会で漕艇部が銅メダルの快挙

8月20日（木）～23日（日）に埼玉県の戸田ボートコースで行われた日本ボート協会主催の第42回全日本大学選手権大会で、本学漕艇部の選手が「男子舵手なしペア」種目で銅メダルを獲得しました。

今回「男子舵手なしペア」で3位に入賞し、銅メダルを獲得したのは、漕艇部に所属する工学部4年の窪井俊哉さんと、同じく工学部4年の蒲地耕太郎さんのペアです。また、同大会にて、理学部4年の坂本宗一郎さんも「男子シングルスカル」種目で7位に入賞しました。漕艇部の活躍に今後ご期待ください。

「男子舵手なしペア」で3位に入賞し、今年度の主将も務めた蒲地耕太郎さんのコメント

今シーズンはなかなか思うように結果が出せず、非常に苦しいシーズンでした。そんな中で最後のインカレで3位入賞という結果を納めることができ、嬉しさと安堵が混ざったような気持ちです。今回このような結果を出せたのは決して自分の力だけではなく、最後まで信じてくれたコーチや、裏で真剣にサポートをするマネージャー、自分を追いかけてくる後輩、引退されても応援に来てくれるOB・OGの方たちのおかげです。自分一人では絶対に成し遂げられなかったと思います。本当にありがとうございました。



「男子舵手なしペア」種目3位 窪井俊哉さん(工4)・蒲地耕太郎さん(工4)



「男子シングルスカル」種目7位 坂本宗一郎さん(理)

◆ 理系志望の高校生が3日間の研生活体験

茨城大学では、茨城県教育委員会からの委託事業として、平成27年度未来の科学者育成プロジェクト事業「高校生科学体験教室」を実施しました。これは、理系大学への進学を希望している高校生たちが、高校の夏季休業にあたる7月下旬～8月の期間中の3日間、大学の研究室において教員や大学院生の指導のもと科学実験などを行い、研生活を体験するというものです。茨城県内では、茨城大学と筑波大学が高校生を受け入れており、今年度、茨城大学では理学部、工学部、農学部の3学部、13の研究室で、合計36人の高校生が体験に参加しました。

このうち、理学部物性物理研究室では、X線回折装置を用いて、さまざまな物質の結晶構造を調べる体験プログラムを実施しました。最初の2日間で、典型的な物質での実験によって回折の基本原則を学習した参加者たちは、最終日には身近にある調味料などの粉末をそれぞれ持ち寄り、装置でそれらの回折パターンを調べました。参加者の一人は、「高校にはない機器を使った実験で、物質の深い構造を知ることができ、大学への興味が高まった」と感想を話しました。

また、理学部の太陽宇宙環境シミュレーション研究室で行われたのは、学習用のロボットキットとプログラミングを使い、ロボットの製作、操作やゲームをする体験です。この教室に参加したのは工業高校の生徒たちで、普段からプログラミングを学習しているとのこと。その知識や能力には、指導を担当した大学院生も驚いていました。

工学部の人間情報工学研究室では、人間の身体の動きを非接触三次元計測によってデータ化、分析する実験を実施。最終日には、参加者たちが実験結果を資料にまとめ、スライドを使って成果を発表しました。発表の内容、まとめ方についても教員から指導を受け、最後に大学院生から参加者へ修了証が手渡されました。

いずれの研究室も和やかな中にも真剣な雰囲気で行われ、参加した高校生も、また指導を担当した教員や大学院生も充実した様子でした。



X線回折装置を使って身近な物質の解析を体験



シミュレーションプログラムを作ってロボットを操作

◆ ひらめき☆ときめきサイエンス「ips 細胞から眺めよう、私たちの未来社会」

9月12日(土)・13日(日)の2日間、茨城大学教育学部の教育保健教室(担当:石原研治准教授)において、ひらめき☆ときめきサイエンス「ips 細胞から眺めよう、私たちの未来社会」が開催され、初日は小中学生9名、2日目は高校生25名が参加しました。

高校生向けのプログラムは、ノーベル賞受賞者の山中伸弥京都大学教授に関する出版物や新聞記事を読みながら ips 細胞が誕生する経緯を学ぶオリエンテーションから始まり、顕微鏡での ips 細胞観察、再生医療を理解するための基礎講義、ips 細胞の利用方法や未来の再生医療についての議論など、盛りだくさんの内容でした。今回、専門分野の並ぶ科学の世界を小中学生や高校生にも理解してもらうため、専門用語を調べるグループワークの進め方などを含め、国語科教育の教員とも協力してプログラムを構成したということです。

今後の再生医療を考えるグループワークでは、先天性疾患への利用の可能性について触れた高校生の発表を受け、石原准教授が「ips 細胞というと、癌などの病気ばかりを思い浮かべがちですが、生まれつきの障害へのアプローチなど、いろいろな可能性が考えられる。医療の世界は専門知識だけでなく、法律や社会情勢など、本当に幅広い知識が必要です。」とコメントすると、参加者たちの表情は引き締まったように見えました。

13日は、日本学術振興会から秋元美世 社会科学専門調査班専門研究員らも視察に訪れ、高校生の活動の様子を熱心に参観。修了式で高校生一人一人に「未来博士号」を手渡した秋元研究員は、「今回の体験をきっかけに、これからも生命科学の世界へ興味を持ち続けてもらいたい」と高校生にメッセージを送りました。



ips 細胞を顕微鏡で観察する高校生



未来博士号の授与(修了式)

◆ 科学研究費学内説明会・研究活動上の不正行為等への対応説明会を開催

9月16日(水)、「科学研究費助成事業(科研費)学内説明会」及び「研究活動上の不正行為等への対応説明会」を水戸キャンパスで開催しました。この説明会は、科研費制度に関する意識を高め、応募件数の拡大と採択率の向上、さらには公的研究費の適正な執行を確保して不正防止等の徹底を図るため、毎年開催しているものです。今年は特に、改正された「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」が適用になったことを受け、「研究活動上の不正行為等への対応」について時間を割いて、公的研究費使用ルールの再確認と不正防止の徹底を図りました。

説明会は、三村信男学長の挨拶につづき、尾崎久記理事・副学長(学術担当)から茨城大学における科研費獲得支援制度と研究不正防止体制についての説明が行われました。

また、企画課による科研費公募要領の変更点及び茨城大学における研究活動上の不正行為等への対応について説明が行われました。

さらに、学内外から科研費審査員の経験者及び採択実績の高い教員を講師に迎え、科研費の応募のポイントについて説明を行いました。

この説明会は、実際の採択実績の高い教員からノウハウを聞くまたとない機会となり、研究計画調書を作成する上で大変参考になる充実した内容であったとして、参加者からは大変好評でした。

当日は、バーチャルキャンパスシステムを利用して説明会の様子を他キャンパスにも同時配信し、約230名が参加しました。



講演する尾崎理事・副学長(学術担当)

◆ 関東・東北豪雨 学生ボランティアが現地で支援

9月10日に関東・東北地方を襲った豪雨による大規模な水害を受け、本学でも学生ボランティアの派遣などさまざまな支援活動が行われました。9月22日（火・祝）には、旅行会社の協力のもと、鬼怒川の決壊により大きな被害を受けた茨城県常総市で支援活動を行うための学生専用ボランティアバスを派遣し、約70人の学生が参加した。学生の参加費は大学が支給しました。

学生たちは、5人程度のグループに分かれ、それぞれ社会人のボランティアとともに民家の片付けなどの作業を行いました。床や家具にこびりついた泥は簡単に落ちず、一日中食器の洗浄に取り組んだ学生もいました。また、農家では水をかぶって故障した農器具を運び出す作業など、若い年齢を活かした力仕事も積極的に行いました。学生ボランティアの一人は、「一日やっただけで身体がくたくたになる。それなのになかなか進まない」ともどかしい表情を見せた上で、「でも、その一步一步の積み重ねしかない。被災者の方々は本当に大変だと思う。継続的にできることを考えたい」と今後の取り組みへの思いを強めた様子でした。

また、この日以外にも、浸水した学校や図書館での作業など、学生や教職員がそれぞれのネットワークを活かして、各地でボランティア活動を行いました。

9月24日（木）、25日（金）には、ボランティアに参加した学生たちの意見交換会を実施。ボランティアバスにも同行した伊藤哲司 人文学部教授の進行のもと、それぞれの作業を振り返りながら、今後のボランティア運営における改善点や継続的な支援のアイデアについて語り合い、学生が継続的にボランティアに参加できる仕組み作りや学内のボランティアサークル同士の連携強化を進めることなどが確認されました。



現地での作業の様子



学生ボランティアの意見交換会

◆ 平成27年度 学位記授与式（9月期）を実施

9月24日（木）、今年9月期をもって学士、修士、博士前期課程及び博士課程を修了する者を対象とした学位記授与式が行われました。今回は課程博士5名、課程修士11名、課程学士25名の計41名（うち留学生5名）に学位が授与され、当日はこのうち26名が出席しました。

修了者たちに学位を手渡したあと、告辞を行った三村信男学長は、グローバル化が進む情勢に言及しながら、大学としてのさまざまな取り組みを説明した上で、「本学で学んだことを活かして、それぞれのフィールドで大いに活躍してください」とエールを送りました。

式終了後は、参列者全員で記念撮影を行い、その後は修了者たち同士や教員と談笑する様子が見られました。



◆ 一般向けにヤギ飼育講座を開催

9月24日（木）、ヤギを飼いたい方や最近飼い始めた方を対象に、講義や実習を通して飼育の注意点などを教える「ゼロからはじめるヤギ飼育講座」（平成27年度茨城大学COC地域人材育成事業）を、農学部の附属フィールドサイエンス教育研究センターで実施しました。

茨城県内のヤギの飼育数は、戸数、頭数ともに年々増加しています。近年は、遊休農地を利用した小規模ソーラー発電設備の設置が広がっており、その除草を目的としたヤギ飼育への関心も高まっているようで、講座には実際にソーラー発電事業を営む関係者の参加もありました。

講座では、農学部の安江 健 教授（畜産学）が、ヤギの特徴や食べ物についての注意点、飼育のポイントを解説したあと、水戸市の種村獣医科医院の種村高一院長が、特にヤギの感染症について細かく説明しました。その後はヤギ飼育場に移動し、安江教授のゼミに所属する学生も協力し、蹄切りなどの実習体験を行いました。

県内で里山を活かしたホテルを開業し、2年ほど前からそこでヤギを飼育しているという参加者は、「ヤギにとっては毒となる植物も、散歩中に食べさせてしまっていることがわかった。感染症についての情報も参考になった」と話していました。講座を担当した安江教授は、「今後もニーズにあわせて続けたいし、県内におけるヤギ飼育のためのネットワークも作っていきたい」と意気込みを語りました。



飼育場で蹄切りなどを体験

◆ 県、市民団体と連携して自然エネルギー開発・推進の人材を育成

9月25日（金）、本学と市民団体のいばらき自然エネルギーネットワークおよび茨城県との共催により、再生可能エネルギーの開発・推進に関わる人材を育成する「いばらき自然エネルギー開発コーディネータ養成プログラム」を、県内の市町村の職員や市民団体の関係者などを対象に開講しました。

同プログラムは、再生可能エネルギーへの関心が高まり、地域における事業への投資、地域主導の開発・推進を担う人材の育成が求められる中、茨城県、いばらき自然エネルギーネットワーク、茨城大学という官・民・学の連携で昨年スタートしたものです。県内の各地域で再生可能エネルギーの事業に関わっている市町村の職員や市民団体の関係者などを対象とし、国や県の担当者による制度・政策についての講義や、先進的な地域での実地研修を通して、地域の環境や社会の持続可能性を視野に入れた事業の企画・立案、協議や合意形成を進めることができるコーディネータの育成を図ります。

今年度は、12名が全8回の研修を受講します。9月25日（金）に行われた初回講座では、いばらき自然エネルギーネットワークの代表も務める小林 久 農学部教授が受講者向けのガイダンスを行ったあと、一般にも公開する形で講演が行われました。前半は、経済産業省関東経済産業局の担当者が、「国の再生可能エネルギー関連の制度・政策」と題して講演。また、後半は茨城県の新エネルギー対策室の伊佐間 久 室長が、茨城県の再生可能エネルギー関連の施策について説明しました。

受講者は今後、講義や合宿形式の現地研修、ワークショップなどを通して、再生可能エネルギーの企画立案のための知識や事業化の手法を学びます。12月に行われる最後の講座では、修了証が渡される予定です。



初回講座での講演の様子

◆ 大学の男女共同参画の最前線を学ぶ学内シンポ

9月28日（月）、大学の男女共同参画の推進について考える教職員向けのシンポジウムを、先進的な取り組みを進めている筑波大学と東京農工大学から講師を招き、開催しました。

シンポジウムは、「平成27年度茨城大学男女共同参画シンポジウム～大学における男女共同参画・最前線～」と題し、開会にあたって挨拶をした三村信男学長は、男女共同参画の推進は重要な課題であり、更なる環境改善に向けて大学全体で取り組んでいくとした大学の方針を語りました。

基調講演を行った筑波大学教授でダイバーシティ推進室室長（講演当時）の溝上智恵子氏は、本部主導の人事戦略が学内の女性研究者の比率の向上に着実に繋がっていることや、企業や他の研究機関との連携による「つくば女性研究支援協議会」の活動、さらに将来の女性研究者を育成する中高生のための理系進路支援プログラムなど、筑波大学における女性研究者支援の具体的な取り組みを紹介しました。その上で、近年はダイバーシティを推進する部署として、LGBTの学生・教職員などへの支援体制の構築も進めていることにも触れました。また、東京農工大学副学長で女性未来育成機構長の宮浦千里氏は、理系学部しかもたない同大での女性学生・研究者比率向上の積極的な取り組みについて紹介しました。女性教員の産休中、ポスドクの非常勤研究者や研究支援員を配置してカバーする体制や、NPOに敷地を無料で貸し出すことによる学内保育所の整備といった具体的な施策の説明に、会場の参加者も興味深そうに耳を傾けていました。

後半は、2名の講師のほか、自らも育児をしながら研究活動を続けている本学の清山玲 人文学部教授と中川尚子 理学部教授の2名が加わり、パネルディスカッションを行いました。ディスカッションでは、女性研究者の支援やワークライフバランスの基盤整備に向けた重要なポイントとして、外部資金の活用や、推進に向けた男性教職員との協力、理念だけでなくニーズをきちんと把握することなどが挙げられました。

最後に閉会の挨拶をした茨城大学の尾崎久記副学長は、「今回の議論を通して、常識は変えられるという思いを強めることができた。男女共同参画の推進に向けて、みなさんと一緒に取り組んでいきたい」と述べました。



パネルディスカッションの様子

◆ 人文学部 茨城県小美玉市と連携協定を締結

本学人文学部は、茨城県小美玉市と地域連携に関する協定を締結しました。9月29日（火）に同大人文学部長室において協定調印式を実施し、佐川泰弘学部長と島田穰一小美玉市長が調印を交わしました。

茨城県のほぼ中央部に位置する小美玉市は、全国でも有数の酪農地帯で、乳製品の普及や健康増進などを目的に乳製品での乾杯を推進する条例をつくるなど、ユニークな取り組みを行っています。今回の式でも、同市内の茨城空港で販売している「空のえきそ・ら・らヨーグルト」で乾杯し、調印を祝いました。

人文学部と小美玉市は、これまでも「まち・ひと・しごと創生有識者会議」への教員の参画、学生インターンシップの派遣など、さまざまな連携を行ってきました。調印式で佐川学部長は、「人文社会系の学部としての今後の教育において、地域自治体との連携協力は重要であり、現場を学び課題解決ができる人材を育てたい。茨城空港を抱え、地域振興に特色ある施策を進めている小美玉市との連携に期待している」と挨拶し、また、島田市長からは、COC 拠点の一つとして指定を受けている茨城大学からの支援、「まち・ひと・しごと創生」の諸政策を展開するための支援への期待が述べられました。

今後は、地域特性を生かした産業の振興とまちづくりの推進、地域の発展に寄与する人材の育成や人材交流の促進による地域コミュニティの活性化、地域の政策課題に関する共同研究の推進などの事業を連携・協力して行う予定です。また、記念のシンポジウムを年度内に小美玉市で開催することも計画しています。



協定書を手にする佐川人文学部長（左）と島田小美玉市長